The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	青年期における祖父母との死別に関する研究(第1報) : 祖父母の死に対する認識と死別反応についての検討
Author(s)	中里, 和弘
Citation	生老病死の行動科学. 2006, 11, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6255
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

青年期における祖父母との死別に関する研究（第１報）
― 祖父母の死に対する認識と死別反応についての検討 ―

A study about grandparent's death in adolescence (1) : Recognition of the grandparent's death and bereavement reactions

（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）　中　里　和　弘

Abstract

This study focused on grandparent's death. The purposes were (1) to describe how grandchildren recognize the death of grandparents, and (2) to develop grandchildren's bereavement reactions scale and to examine the characteristics of grandchildren's bereavement reactions. The participants of this study were 323 university students. As a result, 66% of participants had lost grandparent. Among students who have lost grandparent, 52.0% showed the scores of above 70 points about the closeness with the deceased, and 51.8% showed the scores of above 75 points about the shock for grandparent's death (100 scores are perfection). Factor analysis revealed that the grandchildren's bereavement reactions scale had two factors: *sorrow and yearning,* and *re-experience of image and thought.* The items of the two factors were mainly constructed from emotional and cognitive bereavement reactions.

Key word : grandparent's death, recognition of the grandparent's death, bereavement reactions

Ⅰ　目　的

我々が人生の中で大きな衝撃を受ける出来事の一つとして「対象喪失（object loss)」が挙げられ、これは「愛情や依存の対象をその死によって、あるいは生き別れによって失う体験」と定義される（小此木･深津･大野, 1997)。この対象喪失に関する研究は精神分析学者 Freud (1917) の論文「悲哀とメランコリー」に端を発し（小此木他, 1997)、その後、Lindemann (1944) の「急性悲嘆の症状学とその処置」を始め、多くの死別研究が精力的に進められてきた。日本でも、老年期における配偶者との死別を対象とした研究（河合, 1987；岡村, 1992）やホスピスの遺族を対象とした研究（柏木, 1995；坂口･池永･田村･恒藤, 2005）など、死別体験に関して幅広い実証的研究が行なわれてきている。しかしながらこれらの研究は、主として配偶者、親、子どもを亡くした成人を対象に行われたものであり、青年期以前の死別体験に焦点を当てた研究は限られている。さらに青年期以前の死別体験に関しては、交通遺児家族に関する研究（藤田, 2003）や、親またはきょうだいを亡くした子どもを対象とした事例研究などが行われてはいるものの（松井, 1990；山崎, 1994；高柳･辻尾, 2003)、青年期以前の一般的な死別体験に焦点を当てた研究は少ない。

青年期以前の死別体験に関しては祖父母との死別が最も多く、祖父母の死は子どもが初めて体験する死別である可能性が高いと考えられる（Corr, 2003; Ens & Bond, 2005)。例えば、青年期以前の死別体験に関して、大学生とその親世代を対象に比較調査を行った安藤･松井･福岡 (2004) の研究でも、大学生の約 7～8 割の者が過去10年以内に何らかの身近な人の死を体験し

ており、また、大学生が以前に最も強い影響を受けた死別の続柄別の割合は、祖父母58%、友人15%、他の親戚13%と続くなど、祖父母との死別が最も多いことが報告されている。なお、青年期における祖父母との死別は、孫に悲嘆や死の不安を生じさせるなど、青年期の子どもに大きな影響を与える場合があると考えられる（Ens & Bond, 2005)。したがって、青年期における祖父母の死に対する孫の認識や死別後に生じる反応、死別後に生じる反応に影響を及ぼす要因について知見を得ることは、青年期において祖父母を亡くした孫に対して、周囲の者がどのように理解し、接することが良いのかについて検討する上でも有益であると考えられる。

しかしながら、筆者の知る限りでは、日本において祖父母との死別に焦点を絞った研究はこれまでのところほとんど行われておらず、祖父母の死については十分な議論がなされていないように思われる。そこで本研究では、祖父母との死別に関して第一に基礎研究を行うことが重要であると考え、以下の3点に焦点を当て、祖父母の死について検討を行うことを目的とした。まず、(1)祖父母の死に対する孫の認識について検討する。例えば、孫が祖父母の死に対してどの程度ショックを受けたのかや、孫が祖父母の死から立ち直るまでにどの位の期間を要したのかについて明らかにする。次に、(2)祖父母の死に伴う反応(死別反応)を測定する尺度を作成し、祖父母の死に伴う死別反応の特徴について検討を行う。なお、死別反応に関しては多面的な反応であることが知られている（Shackleton, 1984；Burnell & Burnell, 1989)。そこで本研究では、死別反応を「愛する人の死によって生じる反応(DSM-Ⅳ)」と捉え(American Psychiatric Association, 1994)、死別によって生じる身体的、情緒的、認知・認識的、行動的反応からなる諸反応を死別反応と操作的に定義する。さらに、(3)祖父母の死に伴う死別反応とその関連要因について検討を行う。本研究では、死別反応の関連要因として、性格特性と故人の生前の機能を取り上げる。本稿では、(1)と(2)について報告し、(3)死別反応とその関連要因については、第2報で報告する。

Ⅱ 方 法

本研究を実施するにあたり、青年期以前の死別体験に関して、祖父母との死別の一般性を検証するため、2003年12月、関東の大学に通う学生190名を対象に予備調査を行った。その結果、過去に死別体験のある者の割合は 85%であり、故人の続柄別に見た死別体験者割合は、祖父母68%、親戚29%、友人18%、その他14%、父2%、母1%、同胞1%であった（複数回答可)。したがって、青年期以前の死別体験に関して、祖父母との死別はある程度一般的な体験であると考えられた。

対象と調査方法

2004年11月、関東の大学に通う学生323名（男性105名, 女性218名：平均年齢19.7歳, SD=1.0)を対象に集合法による質問紙調査を行った。323名中、過去に祖父母を亡くしたことのある者は214名（66.3%）であった。このうち故人の続柄について未記入であった14名を除く、男性63名、女性137名 からなる計200名（平均年齢19.6歳, SD=1.1）を分析対象とした。

調査内容

質問項目は以下の通りである。ただし、(3)孫－祖父母関係評価尺度(孫版)、(4)矢田部ギルフォード性格検査については今回の報告に含めない。

(1) 死別に関する属性

最も衝撃を受けた祖父母との死別体験に関して、①故人の続柄、②死別からの経過時間、③

死別時の故人の年齢および回答者の年齢、④死亡原因について回答を求めた。また、⑤故人との親密度（100点満点で得点化）、⑥死別のショック度（100点満点で得点化）、⑦故人に対する回想の困難さ（5件法：「まったくできない」から「完全にできる」）、⑧立ち直りの程度（5件法：「まったく立ち直っていない」から「完全に立ち直っている」）、⑨立ち直りに要した期間（⑧の項目で「ほぼ立ち直っている」または「完全に立ち直っている」と回答した者のみ）について回答を求めた。

(2) 死別反応項目

死別反応項目に関しては、これまでに日本で作成されてきた死別反応を測定する尺度（河合, 1987；富田他, 2000；山田・野島, 2002；松井・安藤・福岡, 2003）から74項目を抽出し、記述内容を過去時制に修正・統一したものを使用した。回答に関しては4件法（「まったくなかった」から「たびたびあった」）を用い、各死別反応項目ついて、死別全体を通してこれまでにどのくらい体験したことがあったのかについて回答を求めた。

死別反応に関しては、故人との関係が親密であるほど死別反応も強いことが報告されている（小島, 1988；Shaver & Tancredy, 2001；松井他, 2003）。したがって本研究に関しても、祖父母との関係が親密であった者ほど死別反応も強いと考えられる。そこで本研究では、死別反応と故人との親密度との関連から、尺度の基準関連妥当性について検討を行った。

(3) 孫一祖父母関係評価尺度（孫版）

田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤（1996）が作成した尺度であり、4因子からなる（26項目［詳細は第2報を参照のこと］）。

(4) 矢田部ギルフォード性格検査（YG性格検査）

辻岡・矢田部・園原によって作成された自己評定式の質問紙法性格検査であり、6因子・12性格特性からなる（120項目［詳細は第2報を参照のこと］）。

Ⅲ 結 果

1．死別に関する属性

故人の続柄

故人の続柄は、父方の祖父が33％、父方の祖母が17％、母方の祖父が35％、母方の祖母が15％であった。

死別からの経過時間

死別からの経過時間の平均は73ヶ月（6年1ヶ月）であり、標準偏差は56ヶ月（4年8ヶ月）であった。死別からの経過時間からみた体験者割合は、3年以内で33.5％、5年以内で53.5％、10年以内で79.5％であった。

死別時の故人の年齢および回答者の年齢

死別時の故人の平均年齢は76.6歳（SD=8.2）、回答者の平均年齢は13.6歳（SD=4.8）であった。

死亡原因

死亡原因別の回答割合は、病気・老衰94.0％、交通事故2.5％、交通事故以外の事故1.5％、その他2.0％、自死0％であった。

故人との親密度

最も親密な関係を100とした場合、回答の得られた故人との親密度の範囲は0－100であり、

平均は62.0点（SD=28.2点）であった。52.0％の者が故人との親密度を70点以上と回答しており、全体の10.3％の者は故人との親密度を100点と回答していた。

死別のショック度

過去に最もショックを受けた出来事を100とした場合、回答の得られたショック度の範囲は0－100であり、平均は67.3点（SD=28.2点）であった。51.8％の者が死別のショック度を75点以上と回答しており、全体の16.7％の者は死別のショック度を100点と回答していた。

故人との親密度と死別のショック度との関連についてピアソンの積率相関分析を行った結果、有意な正の相関が認められた（$r=.54, p<.001$）。したがって、故人との親密度が高いほど、死別に対するショック度も高いと考えられる。

故人に対する回想の困難さ

故人のことについてどの程度苦痛を伴わずに思い出すことができるかについて回答を求めた。「まったくできない」と回答した者は６％、「ややできない」と回答した者は14.6％、「どちらともいえない」と回答した者は15.0％であった。「ほぼできる」と回答した者は33.2％、「完全にできる」と回答した者は31.2％であった。

立ち直りの程度

祖父母との死別から、現在どの程度立ち直っているかについて回答を求めた。「まったく立ち直っていない」と回答した者は0.5％、「やや立ち直っていない」と回答した者は7.5％、「どちらとも言えない」と回答した者は10.0％であった。「ほぼ立ち直っている」と回答した者は24.5％、「完全に立ち直っている」と回答した者は57.5％であった。

故人に対する回想の困難さと立ち直りの程度との関連についてピアソンの積率相関分析を行った結果、有意な正の相関が認められた（$r=.54, p<.001$）。したがって、死別から立ち直っている者ほど、故人のことについて苦痛を伴わずに回想することができると考えられる。

立ち直りに要した期間

現時点でその故人との死別から立ち直っていると認知している者を対象に、回答の得られた立ち直りまでに要した期間の範囲は0－60ヶ月（５年）であった。ただし分布に偏りが見られたことから（歪度=2.8）、代表値として最頻値と中央値を算出した。最頻値、中央値ともに、値は１ヶ月を示した。なお、53.3％の者が１ヶ月以内に立ち直り、75.9％の者が６ヵ月以内に立ち直っていた。死別後1年以内では89.1％の者が立ち直っていた。

２．祖父母の死に伴う死別反応

2-1　死別反応尺度の因子構造

まず、項目間の冗長性を避けるため、全74項目についてピアソンの積率相関分析を行い、項目間の相関係数の絶対値が.70を超える計18項目を分析対象から除外した。次に、残った56項目について回答の偏りを把握するため、回答の分布を確認し、歪度を算出したところ、歪度が1.0を超える項目が30項目存在した。これらの項目は「まったくなかった・あまりなかった」といった方向に回答が偏っており、分析対象から除外した。そこで歪度が1.0以下であった26項目について、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子数は、固有値・寄与率・解釈可能性に基づき総合的に判断した結果、２因子を最適解として採用した。次に、因子を構成するのに良好な項目を採用するため、因子の適合度を検討する SEFA2002（step-wise variable selection in exploratory factor analysis）を用いたステップワイズ探索的因子

分析（Kano&Harada, 2000）を行った。SEFAにより適合度を吟味し、さらにクロンバックのα係数および因子の内容的妥当性が保たれるように配慮し、項目を選択した結果、最終的に2因子13項目が採用された。第1因子は「心の中にぽっかりと穴があいてしまったように感じた」など、大切な人を亡くしたことによる悲哀感を表す項目や、「その人にふと会いたい」など、亡くなった人を恋しく思う故人への思慕を表す項目から構成されたことから、これを「悲哀感と思慕」と命名した。第2因子は「その人の死を取り巻く出来事を想像した」、「その人のことが頭から離れなかった」など故人に関するイメージや思考についての再体験を表す項目から構成されたことから、これを「イメージと思考の再体験」と命名した。各因子のα係数は、「悲哀感と思慕」が0.89,「イメージと思考の再体験」が0.83であり、尺度全体のα係数は0.91であった。また、2因子モデルにおけるデータの当てはまりは良好であった（$\chi^2[64]=68.50, p=.33$；GFI=.95；AGFI=.93；RMSEA=.02）。因子ごとに項目得点を加算し、下位尺度得点として算出した。得点が高いほど死別反応が強いことを意味する。合計得点について正規性の検定（コルモゴロフースミノフ検定）を行った結果、正規分布であることが確認された（Z=.707, p=.70）。また、各死別反応項目の体験者割合（「たびたびあった」または「少しあった」と回答した者の割合）の範囲は、30.3%－71.6%であった。死別反応尺度の内容、因子負荷量、因子寄与率、因子間相関、各因子のα係数、各項目ごとの回答者割合をTable 1に示す。

Table1　死別反応項目の因子構造

番号	項目	F1	F2	h^2	回答者割合(%)			
					①	②	③	④
Ⅰ.	悲哀感と思慕(α=.89)							
3.	心の中にぽっかりと穴があいてしまったように感じた	.78	.02	.63	13.8	25.0	40.8	20.4
8.	どんな理由であれ、その人はもういないとか、帰ってこないという現実に直面し、辛い気持ちになった	.76	.06	.64	16.3	18.9	32.1	32.7
18.	亡くなったことが悔やまれた	.75	.06	.63	12.9	25.5	36.1	35.6
71.	その人にふと会いたいと思った	.75	.06	.63	20.5	17.9	33.2	28.4
4.	あたかもその人がいるかのように感じることがあった	.62	-.04	.35	23.5	24.0	29.6	23.0
63.	その人がいないことに寂しさを感じた	.55	.32	.64	20.5	18.9	41.6	18.9
31.	その人に関するもの(写真、使っていたものなど)を見ると思い出すことがあった	.54	.17	.44	26.4	13.0	35.8	24.9
Ⅱ.	イメージと思考の再体験(α=.83)							
55.	心身ともにがっくりと疲れを感じた	-.04	.81	.61	48.7	19.9	25.1	6.3
62.	物思いにふけった	.00	.75	.56	44.7	18.9	26.8	9.5
65.	自分を責めたり、自分のしたことを悔やんだりした	.05	.56	.36	53.9	15.7	19.8	10.6
40.	夢を見ているようで、目の前のことが現実とは思えなかった	.13	.52	.38	47.1	22.0	22.0	8.9
48.	その人のことを想像して辛い気持ちになった	.34	.49	.58	29.3	19.9	33.0	17.8
42.	その人の死を取り巻く出来事を想像した	.17	.45	.34	37.7	20.9	29.3	12.0
	寄与率(%)	46.5	5.56					
	累積寄与率(%)		52.11					
	因子間相関(F2)	.66						

回答：①まったくなかった ②あまりなかった ③少しあった ④たびたびあった

Table2　男女別にみた死別反応尺度得点の平均とｔ検定結果

	男性(N=59)	女性(N=131)	
	平均点(ＳＤ)	平均点(ＳＤ)	t値
悲哀感と思慕	17.5 (5.83)	19.3 (5.65)	-2.00*
イメージと思考の再体験	11.4 (4.46)	12.5 (4.66)	-1.46
合計得点	28.9 (9.47)	31.8 (9.51)	-1.91†

† p <.10 ， * p <.05

Table3　各カテゴリー別に見た歪度が1.0を超えた死別反応項目の回答者割合

項　目	回答者割合(%)			
	①	②	③	④
身体的反応（体験者割合の範囲:11.9%－6.2%）				
睡眠がうまくとれなくなった(寝つきが悪くなった、眠りが浅くなった、朝早く目が覚めるようになった	66.3	21.8	9.3	2.6
お腹の具合が悪くなった(胃痛、腹痛、下痢、便秘など)	74.7	18.4	2.1	4.7
胸がドキドキするようになった	71.5	22.3	5.7	0.5
情緒的反応（体験者割合の範囲:10.4%－8.8%）				
写真、状況、音楽、場所などからその人について思い出すと、楽しみを感じることができなくなった	62.8	26.7	9.4	1.0
写真、状況、音楽、場所などからその人について思い出すと、強い恐怖感を感じた	71.1	20.1	5.2	3.6
認知・認識的反応（体験者割合の範囲:15.3%－4.1%）				
あたかもその人の声を聞いているかのように感じることがあった	62.1	22.6	11.6	3.7
今にも自分が駄目になってしまうのではないかと思った	54.6	31.6	9.7	4.1
あたかもその人を見ているかのように感じることがあった	59.7	26.7	11.0	2.6
あたかもその人が私に触れているかのように感じることがあった	61.1	26.9	9.3	2.6
何もかもいやになった	60.4	30.7	8.3	0.5
人から悪く思われている気がした	73.8	17.8	6.8	1.6
まわりのものが自分とは無関係のように感じられた	64.4	29.3	4.2	2.1
他人に対してやさしい気持ちになれなくなった	71.0	23.1	5.9	0.0
人の欠点や悪い面ばかり目がいった	76.4	19.4	3.1	1.0
できることなら死んでしまいたいと思った	84.3	11.5	3.1	1.0
行動的反応（体験者割合の範囲:17.8%－5.3%）				
見知らぬ人に、その人の面影をさがした	64.4	17.8	11.0	6.8
記憶が抜け落ちて思い出せない出来事があった	63.9	18.3	11.0	6.8
その人の夢について思い出すことがあった	63.9	18.8	12.6	4.7
わけもなく興奮した	57.9	27.2	12.8	2.1
むやみに動きまわり、じっとしていられなくなった	55.4	30.3	12.3	2.1
気がつくと、その人のイメージや記憶のことばかり考えていた	57.6	28.8	10.5	3.1
頭の中が真っ白になって何も考えられなくなった	63.2	24.2	11.1	1.6
すぐそのことが頭に浮かんできて、注意が乱された	66.5	23.0	7.9	2.6
次々とよくないことを考え、とりこし苦労をした	72.6	17.4	5.8	4.2
冷静に物事を考えることができなかった	67.9	23.8	6.7	1.6
自分の殻に閉じこもるようになった	74.1	19.6	4.2	2.1
生活のリズムが狂った	69.9	23.4	4.2	2.1
とてもイライラしたり、ちょっとしたことでも気にさわった	73.2	20.5	4.7	1.6
消極的になり、行動が控え目になった	67.0	27.2	4.7	1.0
複雑な思考や柔軟な思考ができなくなった	74.2	20.5	4.2	1.1

回答：①まったくなかった ②あまりなかった ③少しあった ④たびたびあつた

基準関連妥当性の検証

死別反応尺度合計得点と故人との親密度について、ピアソンの積率相関分析を行った結果、有意な正の相関が認められた（$r=.55, p<.01$）。

死別反応と性別との関連

男女別の死別反応尺度得点（合計得点・下位尺度得点）についてt検定を行った結果（Table 2）、「悲哀感と思慕」に関して、女性の方が男性に比べて有意に高い得点を示した（$t=-1.98, p<.05$）。また、合計得点に関しても、女性の方が男性に比べて高い得点を示す傾向にあった（$t=-1.85, p<.10$）。

2-2　歪度が1.0を越えた死別反応項目

歪度が1.0を超えた30項目に関して、死別反応の区別・分類を扱った先行研究（Shackleton, 1984；小島, 1988；Burnell&Burnell, 1989; Stroebe, Hannsson, Stroebe & Schut, 2001）を参考に、身体的、情緒的、認知・認識的、行動的反応の各カテゴリーごとに分類を行った（Table 3）。各項目ごとに回答者割合を算出したところ、死別反応30項目の体験者割合（「少しあった」または「たびたびあった」と回答した者の合計）の範囲は4.1％－17.8％であり、死別反応尺度を構成した13項目の体験者割合（30.3％－71.6％）に比べて、低い値を示した。

Ⅳ　考　察

本研究の対象者である大学生323名のうち約7割の者が祖父母との死別を経験しており、安藤他（2004）の研究報告と同様、大学生に関しては、ある程度の割合の者が過去に祖父母との死別を経験しているものと考えられる。祖父母の死に対する孫の認識に関しては、約半数が祖父母との親密度を70以上と回答し、10％の者は祖父母との関係を最も親密な関係であったと認識していた（新密度を100点と回答）。また、死別のショック度に関しても約半数が75以上と回答し、17％の者は祖父母の死を最もショックを受けた出来事であったと認識していた（ショック度を100点と回答）。したがって、大学生にとって亡くなった祖父母との関係は親密なものであり、祖父母との死別はこれまでの人生経験の中で大きな衝撃を受けた出来事の一つとして認識される場合があると考えられる。

回想の困難さと死別からの立ち直りの程度との関連については、死別から立ち直っている者ほど故人のことについて苦痛を伴わずに回想することができることが示唆された。この結果は、故人に対する回想の困難さを死別からの立ち直りの指標の1つに挙げている先行研究（小島, 1988；相田, 2003）を支持する結果であった。したがって、死別からの立ち直りの指標に関して、故人に対する回想の困難さを用いることには一定の妥当性があるものと考えられる。

死別から立ち直るまでに要した期間に関しては、現時点で立ち直っている者の半数が1ヶ月以内に立ち直っており、76％の者が死別から半年以内に立ち直っていた。死別からの立ち直りに関しては、配偶者と死別した高齢者を対象に行った奥（2000）の研究において、死別から3年経った頃から生活の落ち着きを取り戻す者が最も多かったことが報告されている。また、死別から回復するまでには一般的に1年から2年くらいかかり、子どもを失った場合には2年から5年かかるとも言われている（Burnell & Burnell, 1989）。したがって祖父母との死別に関しては、本研究結果から、他の死別（例えば、配偶者、親、子どもとの死別）よりも比較的早期の段階で立ち直るものと考えられる。

次に祖父母の死に伴う死別反応について考察する。本研究では、「悲哀感と思慕」、「イメー

ジと思考の再体験」の2因子からなる祖父母の死に伴う死別反応尺度を作成した。尺度項目に関しては、記述内容を過去時制に修正・統一したものの、主に配偶者、親、子どもとの死別を対象に日本で作成されてきた尺度から項目抽出を行ったことから、本尺度は一定の内容的妥当性を有していると考えられる。また、故人との親密度との関連性が示されたことからも、一応の基準関連妥当性が確認された。信頼性に関しては、尺度全体での α 係数が0.91であり、内的一貫性が十分に確保されていた。したがって本尺度は一定の妥当性と信頼性を備えた尺度であり、祖父母の死に伴う死別反応を査定する上で有用であると考えられる。

死別反応尺度の内容に関しては、主に情緒的、認知・認識的反応から構成され、身体的反応、行動的反応を反映した項目はほとんど含まれなかった。祖父母を亡くした場合では、他の死別と共通した情緒的、認知・認識的反応が生じる可能性がある一方、他の死別によって生じる可能性のある死別反応と異なる側面が存在するものと考えられる。例えば、各項目の回答者割合の偏りからも、祖父母との死別に関しては、「睡眠障害、腹部の不調、動悸」といった身体的反応、「集中困難、混乱、社会的引きこもり」といった行動的反応などは生じる可能性が低い反応であると考えられえる。ただし、情緒的反応や認知・認識的反応に関しても、「楽しみの減退、恐怖感」といった情緒的反応、「幻覚、自己評価の低下、希死念慮」といった認知・認識的反応は生じる可能性が低い反応であると考えられる。なお、祖父母の死に伴う死別反応尺度を作成すると同時に、体験割合の低い死別反応について検討を行うことは、祖父母との死別後に生じる死別反応に関して、祖父母の死を基準に量的あるいは質的側面から評価を行う上で有益な資料を提供するものと考えられる。死別反応尺度の合計得点を用いて祖父母の死に伴う死別反応を評価することは、反応自体は祖父母の死において生じうる反応ではあるものの、量的側面での過度な死別反応を評価することができると考えられる。また、祖父母の死において、生じる可能性が低い反応を示すことは、これらの反応を孫が訴えた場合に、質的側面から死別反応について注意を向ける上で重要な１つの指標になるものと考えられる。

本研究では、死別反応に関して女性の方が死別反応を生じやすい傾向にあることが示唆された。これは女性の方が男性に比べて死別反応が強いとする従来の知見と符合するものであった（富田他, 2000；松井他, 2003）。また、本研究では、「悲哀感と思慕」といった死別反応において性差が認められた。これは、女性の方が男性よりも死別後の困難に対して自己の感情に注意を向けやすく、その結果として感情面を反映した対処行動をとりやすいといった男女間の対処行動の違いが関連しているのではないかと考えられる（富田他, 2000）。

今回の研究では、祖父母の死別に伴う死別反応に焦点を当てた。しかしながら、大切な人を亡くした際に死別反応が生じることは、当然の結果であるとも考えられる。したがって、本研究で扱った死別反応が生じているからといって、一概に問題であると捉えることには弊害があると思われる。祖父母との死別に関しては、今後、死別後の有益性発見（Davise, Nolen-Hoeksema & Larson, 1998；Bonnano & Kaltman, 1999；坂口, 2002）といった死別体験を通して得られる肯定的な変化を含めたより包括的な検討を行っていくことが重要であるといえる。

付　記

本論文は、筆者が2004年度卒業論文として、文教大学人間科学部に提出したものを修正・加筆したものである。本論文の作成にあたり、ご指導いただいた文教大学人間科学部 助教授 石原俊一先生に深謝いたします。

V　参考文献

相田 充 2003 愛する人の死、そして癒されるまで：妻に先立たれた心理学者の"悲嘆"と"癒し". 大和出版.

American Psychiatric Association 1994 Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 4th edition. Washington, D.C., American Psychiatric Association.

安藤清志・松井豊・福岡欣治 2004 近親者との死別による心理的反応ー予備的検討. 東洋大学社会学部紀要, 41(2), 63-83.

Bonanno, G.A. & Kaltman, S. 1999 Toward an integrative on bereavement. *Psychological Bullentin,* 125, 760-776.

Burnell, G.M. & Burnell, A.L. 1989 Clinical Management of Bereavement:A Handobook for Healthcare Professionals. New York: Human Sciences Press.

Corr, C.A. 2003 Grandparents in death-related literature for children. *OMGA the Journal of Death and Dying,* 48(4), 383-397.

Davise, C.G., Nolen-Hoeksema, S. & Larson, J. 1998 Making sense of loss and benefiting from the experience: Two construals of meaning. *Journal of Personality and Social Psychology,* 75, 561-574.

Ens, C. & Bond, J.B.Jr. 2005 Death Anxiety and Personal Growth in Adolescents Experiencing the Death of a Grandparent. *Death Studies* 29(2), 171-178.

藤田悟郎 2003 交通事故の精神的後遺症. トラウマテック・ストレス, 1(1), 39-45.

Kano, Y. & Harada, A. 2000 Stepwise variable selection in factor analysis. *Psychometrika,* 65, 7-22.

柏木哲夫1995 ターミナルケアと人間理解 その8ー死別後の悲嘆ー. *Molecular Medicine,* 32(5), 566-570.

河合千恵子 1987 老年期における配偶者との死別に関する研究ー死の衝撃と死別後の心理的反応ー. 家族心理学研究, 1, 1-16.

小島操子 1988 遺族のケアー悲嘆反応への危機介入ー. 教育と医学, 36, 843-850.

Lindemann, E. 1944 Symptomatology and management of acute grief. *American Journal of Psychiatry,* 101, 141-148.

松井江美子 1990 夢を話す女の子（その1)ー亡くなった母に対する喪の仕事とエディプス葛藤ー. 精神分析研究, 34(2), 60-66.

松井豊・安藤清志・福岡欣治 2003 近親者との死別による心理的反応(5)ー死別直後の悲嘆の規定因ー. 第67回日本心理学会大会論文, 246.

岡村清子1992 高齢期における配偶者との死別ー死別後の家族生活の変化と適応ー. 社会老年学, 36, 3-14.

小此木啓吾・深津千賀子・大野裕 1997 精神医学ハンドブック. 創元社.

奥祥子 2000 看病の程度が高齢者の配偶者死別後の心理変化に及ぼす影響. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 11(1), 69-74.

坂口幸弘 2002　死別後の心理的プロセスにおける意味の役割ー有益性発見に関する検討ー. 心理学研究, 73(3), 275-280.

坂口幸弘・池永昌之・田村恵子・恒藤暁 2005 遺族のリスク評価法の開発ー死別後の不適応を

予測する因子の探索ー. 死の臨床, 28(1), 87-93.
Shackleton, C.H. 1984 The psychology of grief : A review. *Advanced in Behavior Research Therapy,* 6, 153-205.
Shaver.R. & Tancredy.M.C. 2001 Emotion, Attchiment, and Bereavement : A Conceptual Commentary In Stoebe, M.S. Hansson, R.O. Stroebe, W. & H.Schut (Eds.) Handbook of bereavement research : Consequences, coping and care (pp.63-88) Washingtto, DG : American Psychological Association.
Stroebe, M.S., Hannsson, R.O., Stroebe, H.W. & Schut, H. 2001 Introduction : Concepts and Issues in Contemporary Research on Bereavement.In Stoebe, M.S. Hansson, R.O. Stroebe, W. & H.Schut (Eds.) Handbook of bereavement research : Consequences, coping and care (pp.63-88) Washingtto, DG : American Psychological Association.
田畑治・星野和美・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本剛・遠藤英俊 1996 青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成. 心理学研究, 67(5), 375-381.
高柳奈生・辻尾佳澄 2003 犯罪によってきょうだいと死別した子どもの人間的成長をどう支援するか. 関西学院大学社会学部 社会学部紀要, 95, 255-268.
富田拓郎・大塚明子・伊藤拓・三輪雅子・村岡理子・片山弥生・川村有美子・北村俊則・上里一郎 2000 幼い子どもを失った親の悲嘆反応と対処行動の測定. カウンセリング研究, 33, 168-180.
辻岡美延 2000 新性格検査法ーYG 性格検査・応用・研究手引ー. 日本心理テスト研究所.
山田淳子・野島一彦 2002 ターミナルケアにおける死別後の悲嘆と対処行動に関する心理学的研究ー緩和ケア病棟の看護婦を対象にー. 九州大学心理学研究, 3, 212-227.
山崎道子 1994 パーソナリティの発達に関する縦断的研究ー父親と死別し母親に養育された一女性の自己同一性をめぐって(Ⅲ)ー. 日本女子大学紀要 (人間社会学部), 5, 219-233.